



写真-1 ふるさと橋から上流を撮影（平成27年5月）

■ ふるさと川の整備事業により“水と緑の憩いの場”が誕生

喜瀬川は、神戸市西区神出町の丘陵地を源流とする流域面積 19.8km² の二級河川で、普段は水量の少ない穏やかな川ですが、都市化の進展に伴い大雨になると急に水嵩を増す暴れ川です。県は、昭和 40 年代前半から改修を進めていましたが、「自然を生かした美しい川に」との地元要望もあって、平成 7（1995）年 8 月「ふるさと川の川整備計画」を立案、建設省（現・国土交通省）の認定を得て、同年に工事がスタートしました。事業区間は、山陽電鉄から JR 山陽本線までの延長 2,142m で、県が河川事業として多自然型の川づくりを実施、地元播磨町は公園事業として散策路の整備やトイレの設置などを行うものです。（山陽電鉄より下流は、S43～H11 の播磨高潮対策事業によりすでに改修済）



写真-2 治水基準点である住吉橋から上流を望む



写真-3 ふるさと橋を望む

護岸には自然石を用い、前面には木杭やヤシ繊維ロールを敷くなど生物環境に配慮していますが、何といても緩傾斜の堤防が、水際に近寄りやすくしています。ランドマークとなっている「ふるさと橋」の左岸には町が整備した「野添であい公園」、右岸には平成 19 (2007) 年 10 月開館した「兵庫県立考古博物館」があり、水と緑の憩いの空間が広がっていて、休日には多くの町民が散策する姿が見られます。

■ 阿久根台風から 70 年、風化する災害の記憶

今では、地域の人たちの憩いの場となっている喜瀬川ですが、70 年前には多くの尊い命が失われる大災害がありました。終戦直後の混乱した状況の中、昭和 20 (1945) 年 10 月 8 日から 9 日にかけて、阿久根台風^{※1} が東播磨、西播磨、但馬地域を中心に大災害をもたらしたのです。9 月 17 日から 18 日にかけて「枕崎台風」が宍粟、但馬地域を襲ったばかりで、それから 1 か月も経たないうちに、ほぼ同じコースをたどるように阿久根台風が襲来、この台風刺激された前線が集中豪雨をもたらし、県下で 206 名という多くの犠牲者が出ました。

喜瀬川流域においても土山村で 26 名の尊い命が失われるなど大きな被害が出ましたが、終戦直後の混乱期だったため、残念ながら記録があまり残っていません。喜瀬川沿いに多くのため池が存在する稲美町では、「稲美町史」巻末の年表にほんの 1 行、「阿久根台風により天満大池が決壊」との記述しかありません。また、下流部で大きな被害があった播磨町でも、『阿閑 (あえ) の里』という「町制施行 20 周年記念誌」に、「台風のもたらした豪雨により、上流の調整池の堤防がつつぎに決壊し…」といった記述があるのみです。

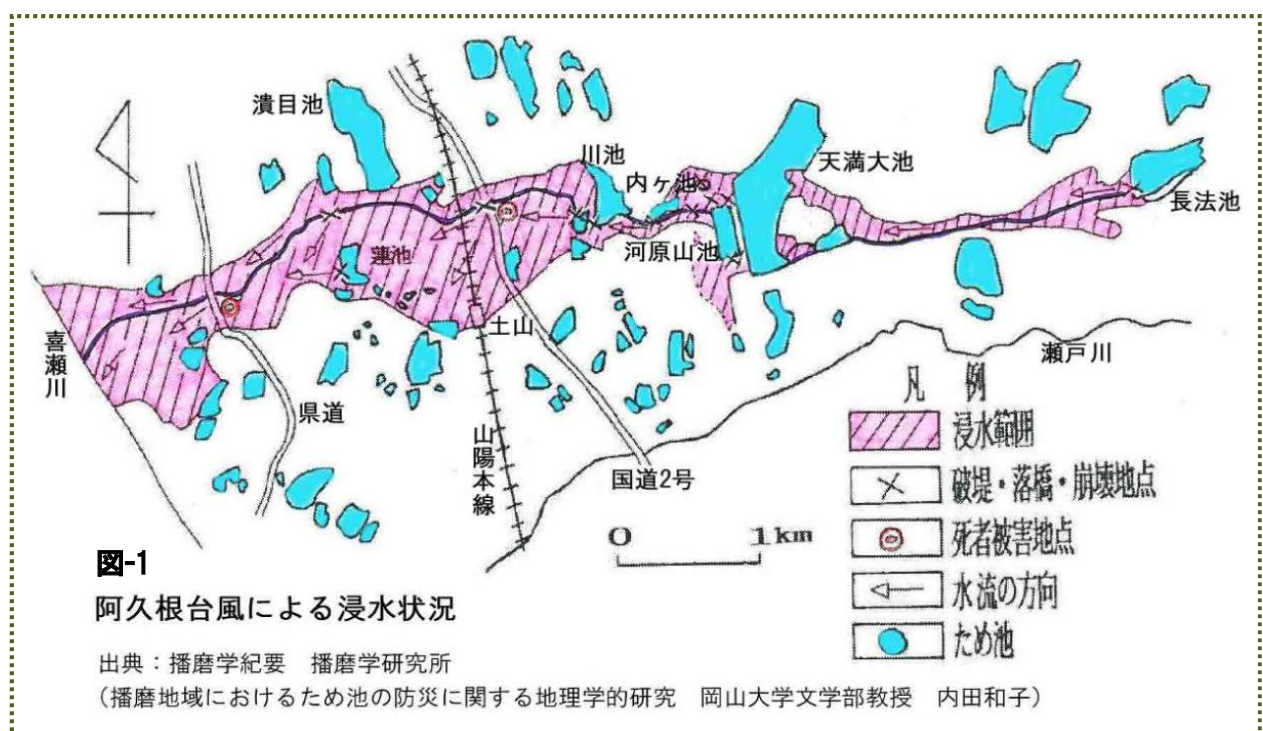
阿久根台風災害からすでに 80 年が経過し、住民の記憶から忘れ去られようとしている災害の記憶について、流域内を歩いて残されている情報を集めてみました。

※1 阿久根台風：昭和 20 (1945) 年 10 月 4 日にグアム島付近に発生し北西に進んでいた台風第 20 号 (阿久根台風) は、次第に発達しながら進路を北寄りに変え、10 日 14 時鹿児島県阿久根市付近に上陸した。その後北東に進み周防灘から中国地方を通過して日本海に出て、津軽海峡の西海上で消滅した。台風接近前から降り出した前線の雨の影響もあり、九州から中部地方にかけての期間降水量は 200~300mm となり、家屋の流失や浸水被害が多く発生した。死者 377 名、行方不明者 74 名、住家損壊 6,181 棟、浸水家屋 174,146 棟 (理科年表による) を数えたが、特に兵庫県では 200 名を超える死者が出た。

■ 溜池決壊に端を発して・・・

阿久根台風災害は、二級河川・喜瀬川の起点直上流にある長法池 (ながのりけ) の決壊に端を発するもので、氾濫流が天満大池に押し寄せ、天満大池の洪水吐付近が決壊、隣接する子池の河原山池に流れ込み、河原山池の堤防も決壊、さらに下流の川池も巻き込んで雪だるま式に増えた洪水は 2.8km 離れた国道 2 号に一気に押し寄せました。国道 2 号の喜瀬川橋とその下流の国鉄橋が流下物で閉塞し、土山本村が湖のような状態になったそうです。

当時の喜瀬川流域の浸水状況は下図のとおりです。



■ 流域に残る災害の記憶

① 長法池

長法池は、明治 24 (1891) 年難工事の末に完成した灌漑用の溜池ですが、翌 25 (1892) 年夏の豪雨で池の堤防が決壊し、国の補助を得て明治 29 (1896) 年に再築されました。

そして、昭和 20 (1945) 年にまたも堤防が決壊するという苦難の歴史を持ち、県営大規模老朽溜池等整備事業による改修が昭和 63 (1988) 年に完了した際に、苦難の歴史を後世に伝えるため、池畔に石碑が建立されています。

右の写真-4 は、昭和 20 (1945) 年に決壊した西堤防の現在の状況です。



写真-4 長法池西堤防

長法池の記

長法池築造の由来は、金澤俊良翁頌徳表によれば、翁等先人達により、明治二十一年この地に溜池を計画して、新田に水を引くべく工を起し、同二十四年艱難辛苦の末、難工事を完遂し、一應の形成をみたるも、翌二十五年夏の豪雨により堤防決壊し、修復不能の状態となる。時の加古郡長深く民情を察知、直ちに復旧を計画し、県知事に懇願、国庫補助を仰ぐ。翁等先人達は、関係農家の委任にもつき協議、淡河川にその源流を求め築造を再度計画、明治二十七年にその工を起し同二十九年に完成せしと云う。その後余水吐、堤防等の補修は重ねられしも、昭和二十年十月九日、本地方に襲来せる阿久根台風の集中豪雨により、西堤防中央部決壊、下流地域に多大の被害を及ぼす。時あたかも太平洋戦争終結の年にして、長期に亘る戦争による疲弊と、冷夏による希有の凶作により耐乏生活の究極にありしが、関係農家は一致協力し復旧に心血をそそぐ。以後時日の経過に伴い以前の決箇所個所及び南堤防よりの漏水著しく、先輩諸氏大改修を上申する。

昭和五十五年県営による大規模老朽溜池等整備事業として採択され、実施設計により今回の大改修となる。総事業費貳億五千万圓、工期三箇年の予定をもって昭和五十六年十一月十日起工式を挙行着工せしも、国の行財政改革による事業費の削減により工事容易に進捗せず、国、県関係機関に度重なる陳情を行い早期完成を懇願、ここに八箇年に及ぶ大改修事業の竣功をみるに至る。今次の改修事業の竣功にあたり、あらためて、幾多先人の遺徳を偲びその功徳を称え、感謝の誠を捧げ以てこれを後世に伝えんがため、組合員に代り岡土地改良区理事長坂井英一その大略をここに記す。

昭和六十三年三月吉日



写真-5 長法池の石碑



写真-6 長法池の記

② 新川池のお地藏様

新川池は、文字どおり喜瀬川を堰き止めて築かれたいわゆる“川池”です。池横にあるお地藏様の祠側面に「昭和二十七年十月建之 発起人 岡本講^{※2}」と書かれているので、おそらく犠牲者の七回忌に建てられたものと思われます。(写真-9/10)

※2 講(こう)：同一の信仰を持つ人々による結社。



写真-7 水位を下げた新川池



写真-8 新川池



写真-9 新川池横のお地藏様



写真-10 お地藏様の祠側面

③ 国道2号法裾にあるお地藏様

右の写真-10は、喜瀬川に架かる国道2号・喜瀬川橋^{※3}から西に約110mの道路法裾(北側)にあるお地藏様です。阿久根台風災害との関連はわかりませんが、国道2号の北側が広範囲に浸水し、大勢の方が亡くなっているので、何らかの関連があると思われます。

※3 喜瀬川橋：L=15.5m。昭和6(1931)年供用開始で、完成からすでに90年以上経過している“超”老朽橋ですが、阿久根台風による洪水にも耐えて今なお現役である。



写真-11 国道2号法裾のお地藏様

④ 天満大池の説明板

池畔にある天満大池説明板の「歴史」の中で、「昭和20年の阿久根台風では、長法池から天満大池中堤、河原山池が決壊し、国道2号と交差する国鉄陸橋^{※4}に漂流分がたまり、土山本村が浸水する災害がおき、昭和60(1985)年～平成9(1997)年の改修工事、(中略)で現在の池の形になりました。」と書かれています。

なお、『兵庫のため池誌』の天満大池の項では、「阿久根台風により大池の南西部の堤体が決壊。その洪水は河原山池の西側道路上の堤塘を押し流し、奔流は一挙に下流の川池をも巻き込み、国道2号から山陽本線の土山駅にも大きな被害をもたらした。」と記されています。



写真-12 天満大池



写真-13 国道2号 喜瀬川橋



写真-14 JR山陽本線・喜瀬川橋梁

※4 国鉄陸橋：P.2の「阿久根台風による浸水状況」では、国道2号と山陽本線の立体交差部にある跨線橋付近に浸水はなかったことから、喜瀬川に架かる国鉄橋梁を指していると考えられる。

⑤ 「中野村・坪刈記録^{※5}」

『加古川市史・史料3』の「中野村坪刈記録」には、豪雨時の状況が「10月4日より毎日大降雨にて稲結実期にこれまた大なる被害を受け10月9日には土山部落貯水池決壊し、一時は漬目(つづれめ)池も危険な状態となり部落男子全部出動警戒せしにより幸いにして難を免れたり……」と記載されており、併せて土山部落の被害状況が下記のように記録されています。

1.流失家屋=19戸	2.全壊=5戸	3.半壊=24戸	4.納屋其他流失=7戸
5.納屋其他全壊=8戸	6.納屋其他半壊=45戸	7.死者=26人	8.浸水家屋・床上=214戸
9.浸水家屋・床下=4戸	10.牛斃死=6頭	11.家具流失=70戸	

※5 坪刈記録：1坪（3.3m²）の稲を刈り取り、これを基礎として全体の収量を推定するもの。江戸期には年貢高を決定する方法として用いられ、明治維新後は地租改正により、地主小作者間の小作料納入算定や供出量割当ての作柄調査に用いられた。現在は、作況調査としてのみ用いられている。

■ モノローグ

阿久根台風による災害の状況は、これらのほか宮本百合子の自伝的小説『播州平野』でも、被災直後の交通が混乱している様子が描かれていますが、災害から80年が経過した今、災害の記憶はかなり風化してきているのではないのでしょうか。

喜瀬川は、流域面積の約9%を溜池が占め、防災面でも一定の役割が期待できる反面、安全管理を怠ると痛いしっぺ返しを食らうことになりま

す。
阿久根台風災害において多くの溜池が決壊しましたが、10月初旬であれば通常田んぼの水は不要なので、池の水位は下げていたはず。それでも耐えきれなかったのか、あるいは戦争のために多くの男性が村を離れ、溜池の管理が十分にできていなかったのか。いずれにしても、土堰堤は越水にきわめて弱いので、洪水吐の放流能力を十分に確保するとともに、田んぼに水が不要になったら速やかに水位を下げるなど、池の安全管理に万全を期すことが大切です。



写真-15 水位を下げた長法池に餌を求めてコサギやアオサギが飛来（平成24年10月）

【参考資料】

- 『喜瀬川水系河川整備計画』 兵庫県 平成19年
- 『いなみ野台地を潤す“水的路”～淡河川・山田川疎水記録誌』 いなみ野ミュージアム運営協議会 平成22年10月
- 『CON-TECHひょうご15号』（財）兵庫県建設技術センター 平成14年9月
- 『兵庫のため池誌』 兵庫県農林水産部農地整備課 昭和59年3月
- 『加古川市史・史料3～中野村坪刈記録』 加古川市史編纂室 平成8年3月

※発行：平成27（2015）年9月 『ひょうご水百景』No.52

改訂：令和8（2026）年4月 『ひょうご水百景』No.52